総合計画座談会の開催

第２次総合計画 後期基本計画の策定にあたり、計画（案）を周知するとともに、様々な立場の方からの意見・提案を当該計画に反映し、より現実に即した実効性のある内容としていくため、具体的な施策のアイデア等を募る場として、次のとおり市内３箇所で「総合計画座談会」を開催。

（第１部）総合計画「後期基本計画」（素々案）概要説明　（第２部）テーマ別トークセッション

［第１回］しごと・産業 ～ 多種多様な組み合わせでまちの価値を高める～

（論点）まちの中に色々な「楽しい」コトづくりをしていくためには何が必要か

２／17開催・46人参加

とれたて食楽部 シニアアドバイザー	村 松 英 明	袋井市観光協会 理事	大 場 和 明
ふくろい未来づくりラボ 代表	塩 﨑 明 子	静岡理工科大学理工学部建築学科 准教授	石 川 春 乃
（株）大和コンピューター	土 岐 賢 介	（コーディネーター）副市長	鈴 木　茂

［第２回］学び・人づくり・暮らし ～ まちや地域を担う人材を育む～

（論点）人生100年時代での豊かさ創出につながる生涯を通じた学びとは何か

２／18開催・33人参加

山名学園 理事長・山名幼稚園 園長	諸 井 理 恵	小中学生の科学教室主催	岡 本 伸 顕
お結び代表・セラピスト	山 本 成 美	袋井市青少年問題協議会 会長	渡 邊 俊 之
袋井市社会教育委員	丸 山 秀 美	（コーディネーター）副市長	鈴 木　茂

［第３回］健康・つながり・地域 ～ 誰もが活躍できるまちを創る～

（論点）誰もが多様な個性を活かし幸せに暮らせるまちとなるには何が必要か

２／20開催・37人参加

あさば子育て広場「チュンチュン」 代表	永井 由紀子	（社福）明和会 静岡中東遠障害者就業・生活支援センターラック 就業支援ワーカー	髙 橋 幸 孝
健康運動指導士	鈴木 ひろ江	袋井国際交流協会事務局	鈴木 美智子
（一社）ここ咲・行政書士	原 野 英 見	（コーディネーター）副市長	鈴 木　茂

総合計画座談会（第１回：しごと・産業）での議論

（日時）令和２年２月17日（月）午後７時～午後９時
（会場）袋井市総合センター４階 大会議室
（テーマ）
しごと・産業 ～ 多種多様な組み合わせでまちの価値を高める ～
［論点］まちの中に色々な「楽しい」コトづくりをしていくためには何が必要か

（意見等）

〇茶畑の風景は素晴らしく県外にはほとんど無いもの。農の風景を守っていくのは農家のみならず、まちの財産として官民連携で取り組んでいくことが必要ではないか。また、子どもの頃の地域資源に触れる体験は記憶に残り、地域への愛着醸成や人づくりの基礎となる。モノではなくてコト（体験）が重要ではないか。

〇袋井市の人口は９万人弱で規模としてちょうど良く、色々な取組がしやすい規模感。様々なコトづくりには、瞬発的に取り組むだけではなく、皆に楽しんでもらうことが不可欠。取組の内容や手法は変わっても良く、大切なのは楽しいことを継続していくことではないか。また、全体最適への広域的な視点・連携も大切。

〇クラウンメロンや遠州三山など、袋井市はポテンシャルが高いにも関わらず、全国的に知名度が低い。知名度を上げることがブランド力向上につながり、特産品の売上アップなど状況が好転していくのではないか。

〇持続可能なまちづくりをしていくには、教育に力を入れていくべき。先端的な教育を実施することがまちの価値向上につながり、定住や関係人口の増加に結びつくのではないか。

〇人口や高齢化率など、地域によって状況は異なっており、実状を正しく把握することが大事。例えば、どうしたら子育てなどを含めて安心して暮らせるか、働く世代の女性を対象として丁寧なアンケートを取り、地域づくりに反映していく。それを踏まえて住民が自らの地域をどうしたいか考えることがとても大切。

〇まちを魅力的にしていくには、様々な組織や団体、人が有機的につながることが不可欠。また、多世代や新旧住民（地域）は相互に補完し合うことが大事であり、様々な人が出会え、つながる場がまちの中にあると良いのではないか。自治体にはそのようなプラットフォームとしての役割が求められているのではないか。

総合計画座談会（第２回：学び・人づくり・暮らし）での議論

（日時）令和２年２月18日（火）午後７時～午後９時
（会場）月見の里学遊館２階　集会室Ｃ
（テーマ）
学び・人づくり・暮らし ～ まちや地域を担う人材を育む ～
［論点］人生100年時代での豊かさ創出につながる生涯を通じた学びとは何か

（意見等）

〇自ら興味を持ち、体験すること、主体的な楽しさが学びには不可欠。また、仕事以外にも自分ができることや役割を複数持ち、それを地域や社会、身近な人に提供できることはとても価値がある。

〇昔を知ることは、当たり前に享受している便利さを実感することに加え、現在に至るまでの人々の様々な工夫や知恵に触れる機会となる。変化が激しい時代を生きるには、自ら学び考える力をつけていくことが不可欠であり、昔を知ることはそうした能力の育成につながるのではないか。

〇組織は継続よりも変容が大事。短期間で変化が生じる時代には、取り組む内容やリーダーも常に変わっていくことが必要。スタイルが変わっていくことを許容する社会・まちになることが必要であり、新陳代謝を繰り返し、当たり前に変化していくことがこれからのコミュニティのスタイルではないか。

〇組織化したりグループが大きくなると“やり辛さ” というものが出てくる。様々な個性（知識・技術）を持つ個人が、自発的かつ緩やかにつながれる場や情報発信の場があれば良い。

〇地域コミュニティなどの役員を担当する年齢が低下し、子育て・働き世代と重なる状況下では過去と同じ内容で活動していくことが困難。その対応として、内容や役割分担を見直すとともに、個々の主体的な参加が大事。目指すべきことが同じであれば、そこに至る過程や内容は変化しても良いのではないか。

〇豊かさを創出する生涯を通じた学びとは、様々な価値観を受容する力やそれにつながるコミュニケーション力を高めていくことではないか。また、幼小の頃から将来を見据えた学習が大事。将来に向け必要があるからやる、という意識変革が必要。短所の克服より長所を伸ばすことが必要ではないか。

総合計画座談会（第３回：健康・つながり・地域）での議論

（日時）令和２年２月20日（木）午後７時～午後９時
（会場）メロープラザ２階　会議室３
（テーマ）
健康・つながり・地域 ～ 誰もが活躍できるまちを創る ～
［論点］誰もが多様な個性を活かし幸せに暮らせるまちとなるには
何が必要か

（意見等）

〇人の個性を伸ばす、とはその人のことを良く知るということ。信頼関係が生まれ、それが次につながる。障がいのある人の中には色々な特性やこだわりがあるが、時間はかかっても自分でやっていることを尊重してあげることが大事。障がいのある方は決して一方的に支援を受けるだけの存在ではなく、様々な形で活躍できる方、望む方も多くいる。その特性を理解し、サポートできることが共生社会の実現には不可欠。

〇人にはそれぞれ異なる文化的背景や価値観があり、違うのが当たり前という前提で誰もが“対等”という意識を持つこと、身近な多様性に気づくことが大事。ありのままで、一人ひとりが認められて生きている社会が本当の共生社会であり、地域や社会はあらゆる存在を受け入れる寛容さを持ち、一緒に地域を創っていく、個々がそういう意識を持ち、活動していくことが必要ではないか。

〇ボランティアは、“やるだけ、受けるだけ”ではなく、そのあり方を変えていくことが不可欠。また、資格や技術が無いから“できない”ではなく、できることをやるのが大事であり、できないことはできる人に任せれば良い。まず一歩踏み出すこと、そして一歩へのハードルを下げる仕組みづくりが必要ではないか。

〇多様性を受容・尊重できる社会・まちとなるには、ＬＧＢＴへの取組が不可欠ではないか。生まれながらの変更ができない特性であり、まずはその理解に向けた取組を進めていくことが必要ではないか。

〇年齢や、性別、国籍や障がいの有無によらず、人にはそれぞれ特技やできることがあり、それを通じて主体的に社会参加していくことが大切。社会参加の機会が多いほど、多様性を受容できる力が高まるのではないか。地域のソーシャル・キャピタルを高める仕組みづくりが自治体には求められているのではないか。